

# 日本産タンポタケには宿主となるツチダンゴ属種が異なる

## 2タイプが含まれる

山本航平\* (信大院総合工)

オフィオコルディセプス科 (Ophiocordycipitaceae) には冬虫夏草類と称される昆虫病原菌が数多く所属するが、本科に属する *Tolypocladium* 属にはツチダンゴ属 (*Elaphomyces*) を宿主とする菌寄生種 (菌生冬虫夏草) が多数含まれることで特徴付けられる。菌生冬虫夏草の中でも、タンポタケ (*T. capitatum*) は北半球温帯域の広域に分布する代表種の一つで、日本国内でも北海道から沖縄県に至る広範囲に分布する。一方で、日本産タンポタケには、子実体の色調や発生時期が異なる少なくとも 2 タイプが含まれることが示唆されていた。

演者は北海道および本州で採集されたタンポタケについて、主に形態的特徴に基づく比較検討を行った。その結果、上記の 2 タイプの存在が再確認され、両者は形態的特徴に加え、宿主となるツチダンゴ属種が異なることが示された。8月から12月にかけて主にマツ科樹種を含む林内で発生するタイプは、ツチダンゴ (*E. granulatus*) を宿主としていた。一方、近畿地方を中心に、主に2月から4月にかけてブナ科常緑樹林またはコナラ林において発生するタイプは、アミメツチダンゴ (*E. muricatus*) を宿主としていた。基準産地であるヨーロッパならびに北米では、タンポタケの発生期が夏から秋であり、宿主の大部分がツチダンゴであることから、国内に発生する前者のタイプが狭義のタンポタケである可能性が高い。一方、後者は未記載種である可能性が示唆された。

菌生冬虫夏草を分類する上で、宿主の正確な同定は重要であると考えられる。しかしながら、現在までに報告された菌生冬虫夏草 (未記載種を含む) には、宿主が未同定である種も少なからず含まれている。今後、菌生冬虫夏草の各種について宿主の同定と分子系統解析を進めることで、宿主-寄生者間の相互作用が両者の種分化に影響したのかという点についても、解明が進むと考えられる。